

証言者番号 26： 非公開証言者 1（匿名）

中国・民衆法廷のメンバーの皆様：

1990年代の中国での強制臓器収奪に関する私の体験の翻訳したものを添付いたします。最初に2015年3月の中国語版「大紀元」に掲載されました。以下の記述は、特にドナーの背景など多くの点で、同記事にさらに情報を加えたものです。英語版は、2019年3月に英語版「エポック・タイムズ」に掲載されました。以下がリンクです。

中国語: <http://www.epochtimes.com/gb/15/3/5/n4379800.htm>

[訳注: 日本語版は2015年3月9日に「大紀元日本」に掲載。]

日本語: <https://www.epochtimes.jp/jp/2015/03/html/d61618.html>

英語: <http://www.epochtimes.com/gb/15/3/5/n4379800.htm>

以下の記述は、英語版の翻訳記事を基盤として、さらに情報を加えたものです。

お読みいただくことに感謝いたします。

軍からの極秘命令

これから記述することは1990年に起こった。当時、私は中国の軍の医科大学の卒業を間近にした学生だった。「瀋陽陸総院」泌尿器科で研修していた。ある日、中国北部の瀋陽軍区から病院に電話が入り、即座に医療チームを車に乗せて、軍務を行うよう命令を受けた。

6人のチームが編成された。女性の看護師2名と男性の軍医3名の、そしてインターンの私だった。主任から命令が下った「今から、親戚や友人を含めた外部との連絡を一切断ち切る」。

即座にワゴン車に乗り込んだ。内部は水色のカーテンで完全に覆われていて、運転席も見えなかった。病院は軍用車も手配していた。その車の扉はまだ閉まっておらず、中に銃を手にした軍人が乗っていた。

軍用車が先導し、高速道路に入ってからサイレンを鳴らしたので、他の自動車は全て通路を譲った。高速で運転し、最終的に目的地に到着した。ワゴン車を降りると、山々に囲まれた

場所だった。軍人が建物周辺の警備にあたっていた。出迎えた軍の幹部は、この建物は、中国東北部の大連市近くの軍の刑務所だと言った。

悪夢の始まり

その夜、我々は軍の宿泊施設に宿泊した。部屋の外には見張りの軍人が立っていた。翌朝、採血をして血液型を判定するために看護師 1 人と 2 人の軍人が刑務所に行った。血液を手にした彼らが戻ると、我々全てがワゴン車に乗り込み、車は走り出した。

車が止まったので、扉の隙間から覗くと、軍人がワゴン車を取り囲んでいるのが見えた。短機関銃を手にしていて、我々には背を向けて外に向かって立っていた。

ワゴン車は囚人が射撃される場所からは離れたところに止められていた。銃声が聞こえた。実際に弾が囚人に当たったのかはわからない。囚人を見た時、後でも述べるが、首から大量に出血していた。首を撃たれたのか、斬られたのか、わからなかった。

我々はワゴン車の中で待機した。動くことは許されなかった。突然、扉をロックされたので、私は扉を開けた。4 人の軍人が、足と首の周りをロープで締め付けられた男を抱えていた。手は後ろで縛られていた。男は無反応だった。

男はワゴン車の中に運び込まれ、床に事前に敷かれていた黒のビニール袋の上に寝かされた。ビニール袋は完全に床を覆っていたので、一目見て、特別に作られたものだと了解した。

男が縛られているロープは、きつければ肉に食い込むほど非常に細いものだった。首から背中に回された手首を繋ぐロープを誰かが踏めば、彼は動くことも、もがくこともできないように縛られていた。動いたらロープは締め付けられ、首を絞めることになる。

医師の 1 人に、ロープを踏みつけ、さらに男が動かないように抑えておくように言われた。大腿部を押さえた時、暖かい体温を感じた。喉のあたりから血が湧き出していた。傷口は見えないが、傷があることはほぼ確実だった。

展開されていく恐怖

この時点で、医療スタッフは皆、手早く手術着に着替えた。看護師長が男の服をハサミで切り開き、腹部全体と胸部を 3 回消毒した。

医師の1人がメスを手にして、胸骨下部から臍部まで、長く切開した。男の脚が痙攣し始めた。医師は腹腔全体を展開した。血液と腸が目の前に溢れ出した。医師は腸管を側方に移動し、腎臓を速やかに摘出した。前立ちの医師は対側の腎臓を摘出した。実に手際良く、熟練しており、迅速だった。

動脈と静脈を切断するように医師に言われた。切断した瞬間、血液が噴き出した。その男性の両手と身体全体に噴き出した。血液は循環しており、疑いなくこの男性が生きていることを実証していた。

この時までには、両側腎臓は摘出され、看護師が保持する臓器搬送用の保存器に入れられていた。

眼球の残酷な摘出

次に私の向かい側にいた医師から、眼球を摘出するように指示された。私は座って顔を近づけた。その瞬間、彼の眼瞼（まぶた）が動き、私を見た。彼の視線があった。恐怖におののく目だった。言葉では表せない恐怖だ。

私の頭は真っ白になり、全身が震え始めた。恐ろしかった。体が動かなくなり、医師に「できない」と告げた。

突然、医師は男の頭を左手で掴み、二本の指で眼瞼を開き、右手に持った止血鉗子を使って眼球をくり抜いた。一回の動作で行われた。

この時点で、私は震えが止まらず、頭から爪先まで汗が吹き出していた。失神する寸前だった。

この前夜、宿泊所で軍の幹部が我々の責任者に会いにきた。その中の一言が印象に残っていた。「まだ18歳になっていない。非常に健康なドナーだ」。この男性のことなのか？

医師が助手席の幹部に終わったことを知らせると、後部の扉が開き、軍人4人がワゴン車に乗り込み、男性を大きなビニール袋にくるみ、近くに停車していた軍用のトラックに引き摺り込んだ。

すぐにワゴン車は走り出した。来た時と同様に軍用車が先導し、猛スピードで病院へ向かった。我々が使った手術着、帽子、ゴム手袋は、病院到着後に処分するため、回収された。

病院に戻ると、臓器は手術室に送り込まれた。手術台の患者に臓器を移植するために外科医のチームが待機していた。何人の外科医がいたかは覚えていないが、手術室には外科医よりも看護師の数が多かった。

レシピエントの顔は見なかった。白い布で覆われていて見えなかったからだ。そこにいたのは麻酔医師のみで、モニターしていた。腎臓移植のために切開されたレシピエントの身体の部分だけは見えた。腎臓は二つ摘出されたが、使われたのは一つだった。手術室でどちらが良いか査定していた。もう一つは棄却されたのだろう。古い腎臓を取り出さずに新しい腎臓を移植していた。

この時点で、私は何もできなくなっていた。身体全体から力が抜けていた。私の状態を見た主任は、横にならせてくれた。横になりながら手術の経過を見ることができた。

囚人のバックグラウンド

その日に殺害された男性の身元を大体把握できるようになった。以前、私は、看護師を同伴して、軍事刑務所の軍人から採血していた。この軍人は、自分を虐待したとして上司を責め、危害を与えた。このため留置され、処罰もしくは軍法会議を待っているところだった。

同時に、別の幹部が、軍のさらに上級幹部のための腎臓を見つける任務を与えられていた。任務の一部としてこの男からの採血を命じた。適合する腎臓がなかなか見つからなかったが、この男性（の血液型と組織型）は適合した。この男性は選ばれて殺害された。この男性をみつけ、血液検査を命じた幹部の口から聞いた話だ。我々が採血をしていたとき、昼食の席で我々に話してくれた。

犠牲になった男性は軍法会議を経て死刑を宣告されたわけではなかったことを明確にした。違法であり、軍による秘密の殺害である。この経過を疑問視する者はいなかった。軍制度で権力のあるものは、好きなように振る舞える。共産党政権下では、人命に対する概念が異なる。権力のあるものが殺害できる。

心の重荷

私はまもなく病院での仕事をやめ、家に戻った。全く気力がなく、高熱が出た。母は何があったのか訪ねたが、お茶を濁した。誰にも打ち明ける勇気がなかったからだ。

しかし心の痛みは全く癒されなかった。考えるだけでもおぞましい体験だった。話すことなどできなかった。人間に対する残虐な殺害を、直接見てしまい、極度な不安に襲われていた。同時に、当局に追跡され殺害されるのではないかと私は恐れた。私は辛労から極めて惨めな日々を送ってきた。

長年にわたり、あの日のワゴン車での光景が、何度もよみがえった。我々と同じ人間が、生存中に臓器を奪い取られるとは…。恐ろしい痛み、恐怖に満ちた視線。これ以上耐えられない。精神錯乱状態に陥ると感じてきた。常に自分が壊れそうだった。

この出来事に関して追跡され質問されることは避けられた。家に戻ってから、上級幹部であった親戚に、軍制度にいるよりも金回りのいい仕事を見つけるチャンスがあったからインターンを辞めることにしたと告げた。この出来事は軍の機密であり、彼らには一言も漏らさなかった。私の家族は、軍基地の上級幹部に、身入りのいい仕事を得るコネができたと告げた。この幹部も私がこのようなことに関わったことなど微塵も思いつかなかっただろう。機密の軍事行動であり、曝露したものは危険にさらされる。

何年経過しても、おぞましい記憶と決別することはできない。ずっとこの問題には触れたくなく、意識的に避けてきた。口にすれば自分を見失ってバラバラになってしまうからだ。

メディアが中国で法輪大法（法輪功）の無実の囚人から強制的に臓器を摘出していることを暴露し始めた時、私はすぐに全てを理解した。全て真実であり、中国共産党の軍制度のもとで、強制臓器収奪は長年にわたり存在していた。法輪大法に対する迫害運動により、より多くの臓器源がもたらされただけのことだ。